

之、イツ、ソタトイハレンズラム云々、

〔續近世畸人傳五〕熊妻

〔續近世畸人傳五〕初云後改む、名は妻、字淇曠、號は繡江、世間俗名をいはず、熊妻をもて亥らる、

〔貞丈雜記書札〕一書狀に、人の名を片苗字に書くを、うやまふ禮とする事、古はなき事也、近代のはやりこと也、古は貴人の名には、一向苗氏をば不書、其次少うやまふ人は、苗字をば二字共に書て、一體の文言脇附等にて、うやまふ禮はある也、書札の法に、人の名を切て、たゞへば一行めの下に細と書、二行めの上に川と書き、細川と云苗氏を二ツに切て書く類を忌む也、然るに今は上書にわざ／＼人の苗氏を切て一字を書く事、古法にも背き、その上無禮なる事也、又下輩へ遣す時は、我苗氏を片苗氏に書く事有、かやうの事も、今は世上一統法式の如くなりたれば改がたし、是非なく當世に隨て書べし、古法は、如此にあらずといふことは知り置べし、

〔伊豫國順廻記三〕周敷村

周敷郡

百姓
平太

今之醫師吉元隆平の父にて、闡齋派の學者なり、寛政の頃、大洲侯に聘せられ、毎年兩度づゝ、其城下に至り、二三ヶ月程逗留す、家老加藤玄蕃よりの手簡に、吉平太様と氏を省字して書きたり、敬信有りしものとは見ゆ、

〔南留別志〕姓ありて苗字なきは京貫の人なり

〔南留別志の辨〕いにしへは姓と氏とのみあり、苗字は近き世に始れり、苗字なき世には、諸國も苗字なし、苗字始りてよりは、京貫の人もあるなり、

〔南留別志〕今之世には、苗字を姓とさだむべきなり、姓の玄れぬ人あるゆゑなり、
〔過庭紀談三〕問フ、然ラバタトヘバ、佐々木氏ノ人ニ附テ云ハ、源ハ唯其本氏ト云ハニヤ、曰然リ、本姓ハ源氏ニテ、後分レテ今姓佐々木氏ニナリタルナリ、氏ヨリ氏ノ分レシナリ、姓ヨリ氏ニ分